

# インターポート

兵庫教育文化研究所だより

No.205

2019年9月6日

発行所 兵庫教育文化研究所  
〒650-0004

神戸市中央区中山手通 4-10-8

## 子どもの感性の可能性を拓く

### 音楽教育部会 臨地研修会

8月30日に、「サウンドスケープ in 淡路」と題した臨地研修を淡路島でおこないました。協力研究所員と研究所員の6人が参加しました。国生み神話がたくさん残る淡路島で、身の回りの音風景に耳を傾けると同時に、五感で環境を体験する「サウンドスケープ」を目的としたフィールドワークです。

「サウンドスケープ」という言葉は、カナダの現代音楽作曲家、R. マリー・シェーファーにより、1960年代末に提唱され、世界中に広まりました。日本語では一般に「音の風景」「私たちがきく音の世界」と訳され、専門的には「個人、あるいは社会によってどのように知覚され理解されるかに強調点の置かれた音環境。それゆえサウンドスケープは、個人（あるいは文化を共有する人々のグループ）とその環境との間の関係によって決まる」と定義されています。

サウンドスケープという用語とその考え方は、地球上のさまざまな時代や地域の人々が、音の世界を通じて自分たちの環境とどのような関係を取り結んでいるのか、どのような音を聞き取りそこからどのような情報等を得ているのかを問題とし、それぞれの音環境を個別の「文化的事象／音の文化」として位置づけます。したがって、サウンドスケープとは「世界を聴（聞）く行為、音の世界を体験する行為によっておのずと立ち表れてくる意味世界」であるともいえるのです。

そこでは、音楽や言語といった「人為・人工の音」はもとより、潮騒や風の音、虫や鳥、動物等の生物の音などの「自然の音」、さらに「静けさ」や「賑わい」といった音環境の特定の状態をも問題にします。また、個別の音を問題にする場合にも、その音をそれが成立する環境全体の文脈のなかに引き戻し、その内容を把握しようとすることを特徴とします。（日本サウンドスケープ協会 HP より）



当日は、あいにく雨が降ったり止んだりの天候でしたが、淡路島のいくつかの海岸で波の音の違いを感じ、鮎屋の滝、そして湧き水のある御井の清水などにふれて、水の音やそこに吹き渡る風の音やにおいを体感しました。また、淡路人形浄瑠璃資料館も訪れ、芸術の中にある音の世界にもふれることができました。音の多様な姿と自然を五感で感じること、そして子どもの感性の可能性を拓いていくことの大切さを再確認することができました。